

氏名（本籍）	藤野 寛之（石川県）		
学位の種類	博士（児童学）		
学位記番号	博甲第35号		
学位授与年月日	平成25年9月30日		
学位授与の条件	学位規則第4条第1項 該当 児童学研究科 児童学専攻		
論文題目	アメリカの児童書批評誌『ホーン・ブック』の研究 ：編集長とその協力者による評論の推移 1924－2000年		
論文審査委員	主査 教授	山内 芳文	
	副査 教授	森 聖雨	
	副査 教授	小泉 卓	
	副査 九州大学 名誉教授	住田 正樹	

## 論文内容の要旨

### 1. 研究の課題と方法

本研究は、2012年10月に創刊88周年を迎えたアメリカ合衆国の児童図書批評雑誌『ホーン・ブック・マガジン（*Horn Book Magazine*）』（以下『ホーン・ブック』と略称）の歴史的な変遷、および、その果たした役割を分析することを課題としている。1924年10月にボストンで創刊された『ホーン・ブック』は、20世紀前期の児童文学の創作を文学として認めさせた功績を持つ。この時期は、児童文学の「黄金時代」であって、19世紀のグリムやアンデルセンの翻案・創作童話に次ぐ新たな傑作（動物ファンタジー、その他）を産んでいた。こうした作品の評価の背景を支えていたのは「批評」であり、それを実現していたのが「雑誌」というメディアであった。この時期はまた、アメリカで初期の「女性解放運動」が盛んとなった時期であり、学芸と文化の都市ボストンはその中心地であった。『ホーン・ブック』の初代編集長バーサ・マオニーとその助手エリノア・ホイットニーは、ともに女性のための高等教育機関シモンズ・カレッジの初期の卒業生であり、1950年まで雑誌の編集を担当していた。マオニーが掲げた基本方針は、「良書の選定」であり、「時代への適応」であって、この二方針はその後の六代にわたる編集長に引き継がれた。歴代編集長の各時期に『ホーン・ブック』は外部の協力者に恵まれていた。主たる協力者は、児童文学の作家・画家、批評家、図書館員、出版社員、読者市民であった。本研究は、この雑誌がいかなる背景のもと、いかなる状況のもとで発達をとげたかを検証するものである。この目的のため、本研究では各編集長の論説および批評家たちの評論を検討するが、七名の編集長ならびに協力者はいずれも健筆であった。『ホーン・ブック』は、このような編集体制のもと、発行部数を順調に伸ばしていった。

本研究に先だつ「研究」には、バーサ・マオニーの伝記、女性史の立場から 20 世紀初頭の女性出版人を考察したジャカリン・エディ著の『図書女性：児童書出版王国の創造 1919-1939 年』、および、文芸評論の立場から考察したジョーン・オルソンの博士論文があるが、いずれも創刊初期の『ホーン・ブック』の成立事情に焦点を当てており、その後の経緯については触れていない。

## 2. 研究の構成と内容

本研究では、20 世紀全体の『ホーン・ブック』誌の歴史を、歴代編集長とその協力者の活動を中心に、大きく三期に分けて考察する。その区分は、雑誌創刊の 1924 年より 1950 年まで（第一期）、1951 年より 1970 年まで（第二期）、1971 年以後（第三期）であるが、それらはアメリカ現代史の大きな区分であると同時に、児童文学発達の「草創期」、「最盛期」、「変動期」として定義付けることができよう。児童書は世相を超越した芸術作品というよりむしろ、作家たちの意識には時代への認識が反映されていた。

第一期では、『ホーン・ブック』誌の編集体制の確立とこれを支えた協力体制が考察される。世界恐慌や第二次世界大戦に直面したこの時期は、ボストン公共図書館のアリス・ジョーダンとニューヨーク公共図書館のアン・キャロル・ムーアおよび児童書出版社の社員が編集長バーサ・マオニーを積極的に協力・支援していた時期であった。一方、この時期は「児童文学の黄金時代」であって、ポター、グレアム、ミルン、ガーク、ワイルダーといった作家・画家たちが、創作童話とファンタジーの傑作を産出していたときであり、『ホーン・ブック』はそれらの評価に大きな功績を残していた。

第二期は、アメリカの児童文学がジャンルとして確立したときであって、それにはいくつかの重要な要素があった。まず、初代編集長が定めた編集方針「良書の選定」に基づいた、ムーアの弟子にあたる、ニューヨーク公共図書館のセイヤーズによる「ディズニー批判」があった。ウォルト・ディズニーが制作する映画や絵本が原作者の意図をゆがめ、主人公をデフォルメしていることに対する痛烈な批判であった。さらに、この時期の児童文学を盛り立てたのは、才能に恵まれた移民の子弟の挿絵画家たち（スース、センダックなど）であって、彼らが刊行する創作絵本は活気ある新たな時代を現出させていた。加えてこの時期、特に 1960 年代以降の冷戦の構図のなかで、日本はアメリカにとってそれを支える第一の友好国であり、日本への関心は「日本研究」の充実をもたらしていた。英語圏以外の世界の他の国よりもこの時期には日本の作品の紹介が重視されていた。『ホーン・ブック』もこの流れのなかにあった。

ベトナム戦争によりアメリカによる世界平和の時代が去った 1970 年代以降の第三期は、人権意識が児童書の領域にも浸透するようになった時期であった。キング牧師の殺害、ベトナム戦争の泥沼化とともに人権意識が表面に出てくるようになった。さらにこの時期には、青少年の意識と行動を扱う「ヤング・アダルト」と呼ばれるジャンルの図書が数多く出版されるようになった。彼らの抱える問題（両親の離婚、妊娠、堕胎）が脚光を浴びる

ようになったからであり、『ホーン・ブック』ではこのジャンルも積極的に取りあげるようになった。そして、「ファンタジー」と呼ばれるジャンルも、トールキンの『指輪物語』、ルイスの『ナルニア国ものがたり』、ローリングの『ハリー・ポッター』の刊行により、従来のファンタジーとは異なる新たな世界を切り開いていた。これらの「ファンタジー」が、主としてイギリスの作家により書かれていた経緯は、「古き良きヴィクトリア朝」の崩壊とそれにとまなう衰退からの脱却、反宗教の時代背景への反発に示されており、それは、特にトールキンとルイスの作品に現れていた。2000 年前後の時期については、本研究の対象外であるが、外国作品の翻訳が一つ的话题となっており、リンドグレン、安野光雅といった作家＝画家の活躍が表面化していた。

児童書の批評といった特殊な分野を扱う雑誌がこのように長期にわたって読者に支持されている例はめずらしいが、本研究はその全容を明らかにするだけではなく、アメリカのみではあるが、作品の評価を雑誌というメディアがいかに扱い、いかにその内容を分析して、読者を裨益することができたかの記録でもあった。同一の児童書が様々な評者によって、異なった面から論じられている。グリムやアンデルセンなどの古典作品は長年にわたって取りあげられ、近年の作品についても新たな意見が常に加わる。以上の三期それぞれについては、編集長や協力者による紹介や批評が、いかなるものであったか、その全貌を具体的に示すために、雑誌所載の論文から選んだ批評、特に歴代編集長とその協力者の文章を抄訳として掲載しておいた。ここには、時代的な背景を含むものも入れてある。例えば、第二次世界大戦の時期に雑誌に掲載された「戦時世界の若者たち」という文章がある。ナチスに対する当時の若者の視点をここから読み取ることができる。

### 3. 研究の成果と展望

本研究では、雑誌に文章を載せている編集者や批評家各人の全体像を把握すべく、人名からの『全巻人名索引』を必要としたため、まず、それを新たに編纂した（参考資料参照）。索引は、雑誌の各年度末に作成されているが、80 年以上にわたるため、編集の方針が一定しておらず、調べなおしたうえで作成せねばならなかった。収録した人物の数が 2 万人を超えるこの『全巻人名索引』を根拠に、本研究ではどの批評家がどれほど『ホーン・ブック』に寄稿しているかの実証を試みている。『ホーン・ブック』誌の詳細を時代的・計量的に調査することによって、児童文学研究に新たな結論が得られたことになる。これにより児童文学研究において、今後さらなる異なったアプローチでの取り組みが行われることを期待したい。

児童文学の研究は、これまで主として作家論・作品論として推移してきた。本研究はそうした論点とは異なり、作家と作品を取りあげた「論評」を中心に据えている。いずれの文学作品といえどもその価値を最初に認めるのは評論であって、それは主として雑誌に掲載される。児童文学にあってはその重要性、特に『ホーン・ブック』といった長年にわたり作品評価の水準を保ってきた雑誌の重要性を認識しておかねばならない。20 世紀前半ま

ではほぼ唯一の児童文学の批評媒体であったにも関わらず『ホーン・ブック』誌を全史にわたり、その編集面から扱った研究はこれまでになかった。個々の作家論・作品論と切り離して児童文学に関する一つの雑誌を総合的に追求する、こうしたアプローチは児童文学の変遷過程の解釈のうえで、さらには、児童の本質の理解のうえで必ずや役立つであろう。

さらに本研究は、児童研究ばかりでなく、情報メディア（大衆文化メディア）研究に通じる側面を併せ持つ。大衆文化メディア研究としての「印刷文化史」＝「雑誌史研究」の重要性は指摘するまでもなく、研究対象として今後はその比重が増してこよう。長期にわたり刊行され続けた雑誌そのものの研究は、全巻全号の検討が内容となるため、さらには、各時期の編集陣の意図をそこから取りあげねばならないがため、容易な作業ではないが、その雑誌が文化史のなかで果たした功績は知っておかねばならないであろう。このジャンルの研究方法を探ることも本研究の課題であった。

#### 【基礎となる論文】

- ・「イギリス伝記事典の伝統と変遷：DNBとODNB」単著/日本図書館研究会『図書館界』Vol. 58, No. 4, p. 220-227/2006年11月
- ・「ジョン・ショウ・ビリングスの二つの生涯」単著/日本図書館文化史研究会『図書館人物伝』, p. 277-297/2007年9月
- ・「ブリティッシュ・ライブラリーの戦略計画（1985-2005）、その意義と影響」単著/日本図書館研究会『図書館界』Vol. 59, No. 4, p. 230-241/2007年11月

## 論文審査結果の要旨

### I. 論文審査の要旨

#### （論文の目的と課題）

本論文は、1924年10月にボストンで創刊されたアメリカの児童図書批評の定期刊行雑誌『ホーン・ブック・マガジン（Horn Book Magazine）』（以下、『ホーン・ブック』）の歴史的な変遷とその果たした役割を明らかにすることを目的としている。この目的を達成するため、本論文では、先行研究の吟味をとおして、各編集長の論説および批評家たちの評論を直接の対象に据え、この雑誌がいかなる背景のもと、いかなる状況のもとで発展してきたのかを検証する作業課題が設定された。

#### （論文の内容と方法）

本論文では、20世紀全体の『ホーン・ブック』の歴史を、歴代編集長とその協力者の活動を中心に、雑誌創刊の1924年より1950年まで（第一期）、1951年より1970年まで（第二期）、1971年以後（第三期）と、大きく三期に分けて考察されている。それらはアメリカ現代史の大きな時代区分であると同時に、児童文学発達の「草創期」、「最盛期」、「変動期」としても意義付けられる。第一期では、『ホーン・ブック』の編集体制の確立とこれを支えた協力体制が考察される。第二期は、アメリカの児童文学がジャンルとして確立した時期、ベトナム戦争によりアメリカによる世界平和（*pax americana*）の時代が去った1970年代以降の第三期は、人権意識が児童書の領域にも浸透するようになった時期でもあった。

#### （論文の行論と結論）

これまで主として作家論・作品論として推移してきた児童文学の研究とは異なり、本論文では、個々の作家論・作品論とはとりあえず切り離して、作家と作品を取りあげた「論評」が中心に据えられ、新たにこれを編集面から扱うことで、ひとつの雑誌の長期にわたる編集傾向が、一般的に承認されている時代区分にしたがって設定された各画期において検討されている。例えば、その第二期では、1960年代以降の冷戦の構図のなかで、アメリカにとって第一の友好国であった日本への関心は「日本研究」の充実をもたらしたことが析出されるなど、結論として、その編集者の関心内容は、その時代状況を色濃く反映した実相として確認されている。

#### （論文についての批評）

本論文では、雑誌に文章を載せている編集者や批評家の全体像を把握するために、まず新たに『ホーン・ブック』の『全巻人名索引』が作成された。収録した人物の数が2万人を

超えるこの膨大な基礎作業を出発点として、同誌の詳細を時代的・計量的に精査することによって、本論文の研究手法は、これまでの児童文学研究に新たな地平を開拓したと評価される。これによって確立された手法は、児童文学研究のみならず、大衆文化メディア研究としての「雑誌文化史」研究への応用など、新たな貢献もおおいに期待される。なお、研究のさらなる進展には、長期にわたり刊行され続けた雑誌の全容の詳細な検討による通史的な方向性が求められるが、これは今後に期待するしかない。しかしながら、本論文はこのための重要なステージを構築したものとしての学術的な意義を確実に有しており、そのことによって本論文が学位論文としての価値をいささかも減ずるものではない。

#### （論文についての判定）

平成25年3月8日、公開の試問において、提出された論文について説明を求め、その内容と関連事項について質疑応答を行い、引き続き審査委員会を開催し、委員全員一致で合格と判定された。

#### （結論）

上記の論文審査及び別途行った最終試験の結果、申請者は博士（児童学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。

## Ⅱ．試問の結果の要旨

#### （公開試問）

平成25年3月8日、11時30分より12時30分まで、公開による試問を聖徳大学大学院児童学研究科において開催し、提出された資料にもとづき最終発表が行われ、それに関して児童学研究科担当者による質疑を行った。

#### （最終試験）

平成25年3月8日、12時30分より13時まで、提出された論文の内容及び関連の事項について、審査委員会による最終試験を、聖徳大学大学院児童学研究科において、口述により行った。引き続き審査委員会が開催され、委員全員一致で合格と判定された。